



## EL1

### 災害疫学研究から考える社会参加と健康

高梨 信之

岩手医科大学 衛生学公衆衛生学講座

#### 略 歴

1998年

岩手リハビリテーション学院  
作業療法学科 卒業(第16期)  
医療法人辰星会 柗記念病院  
リハビリテーション室  
(福島県二本松市)

2005～2014年

岩手県内の病院・事業所にて  
医療介護福祉領域に従事

2015年

岩手医科大学 いわて東北メディ  
カル・メガバンク機構  
岩手医科大学附属病院 リハビリ  
テーション科  
岩手医科大学 衛生学公衆衛生学  
講座(現職)

#### 【社会活動・学会活動(作業療法士)】

- 第37回東北作業療法学会  
学会長(2027年7月:盛岡市)
- 岩手県作業療法士会 副会長・  
学術教育局長
- 日本作業療法士協会 代議員、  
会員福利厚生委員会 副委員長、  
地域社会振興部員(地域包括  
ケア推進班)
- 日本公衆衛生学会、日本衛生  
学会、日本老年療法学会、  
岩手公衆衛生学会 等に所属

発災から15年が経過した東日本大震災では、福島、宮城、岩手を中心とした東北太平洋沿岸部に非常に甚大な被害を与えた。岩手医科大学を含む、被災各県の大学・研究機関では、発災から10年以上にわたる長期間、被災者支援を目的とした大規模疫学研究を継続的に実施してきた。代表的なものが、福島県および福島県立医科大学による「県民健康調査」、東北大学・岩手医科大学による「東北メディカル・メガバンク計画地域住民コホート調査」、そして岩手医科大学による「東日本大震災被災者の支援を目的とした大規模コホート研究 —RIAS研究—」である。

この世界に類を見ない大災害が住民の健康と生活に影響したものは何か、これまでの多くの疫学研究により徐々に明らかにされてきた。発災初期の被災者では、被災による心理的苦痛、抑うつ症状、不眠、PTSDなどのメンタルヘルス低下の他、身体活動量低下、喫煙や飲酒量の増加など、生活習慣にも負の影響を与えてきた。発災から数年経過した復興期に代表されるのは、応急仮設住宅から恒久的な住居(新築・再建・災害公営住宅等)への転居であった。この時期に注目されてきたことが、被災後の社会参加と健康の関連であった。岩手県で最も甚大な被害を受けた自治体であり、演者の故郷でもある陸前高田市では、地域住民同士の社会参加、交流を促進する「はまっぺけらいんかだっぺけらいん運動」が展開された。仮設住宅や地域の中の「互助を育む」支援が、被災した住民のこころを癒し、長期にわたる健康づくりに役立っている。このように、震災発災からの長期経過では、住民の社会参加を維持増進することで、健康状態に良い影響があることが様々な研究で示されている。社会参加は、平時のみならず災害後の地域住民の健康に大きく寄与していることがわかってきた。

東北に住む私たちは災害を教訓に、平時の地域づくりやリハビリテーション支援に生かすことができる多くの知見と経験を得てきた。講演では、災害疫学研究の知見と震災後長期に及ぶ被災地支援の経験を元に、被災地での社会参加と健康を考える機会としたい。